

入来と朝河貫一博士と私



私は信州諏訪の出身です。父が梵文学者だったこともあって、幼時は東京に居り、蔵書の山の中間の出征があり、学問は中断されてしまいました。復員後は家族を養うために母の故郷の諏訪で、慣れぬ商売を始め大層苦労していました。

早稲田史学科国史専修の私も東大東洋史に在学の弟も、奨学金とアルバイトで何とか大學生生活を送っていました。

大学二年も終わる春、当時三年生だった夫と結婚しました。挙式は東郷神社、新婚旅行は夫の父母と一緒に信州經由の鹿児島迄といった簡略なものでしたが、当時は日本全体が貧しく、親がかりのその計らいに感謝したものでした。

初対面の時、「イリキインシゲトモ」という

大仰な名前に吹き出しそうになった私は、その苗字の持つ重みを全然認識していませんでした。ただ、はるばると列車に揺られて降り立った入来の、故郷にはない竹林のしつとりとした風光、玉石垣の連なる古い街並みに、タイムトリップをしたような感じに襲われたものでした。

茅葺きの門をくぐると、もう九十歳という夫の祖母が出迎えてくれました。言葉はさっぱり分かりませんが、品のよい物腰に、私も祖先の名に恥じない嫁にならねばと気が引き締まる思いだったことを思い出します。

その年の夏、鹿児島からずっしり重い本が届きました。それが日本学術振興会から再刊された『入来文書』でした。終戦後夫の家族は、殆どの荷物と共にその初版本をソウルに残して引揚げて来たということで、話には聞いてはいませんが、実物を手にして大変な書物だと感動したことでした。朝河貫一の名前を認識したのはこのときです。

早速辞書を片手にチャレンジしたのですが、

INTRODUCTION も読み切ることが出来ずに終わってしまいました。

しかし初版本では、添付の古文書は翻訳された史料の順序だったようですが、再刊された本には、入来に伝承された文書が大幅に増補され、所蔵家順に配列されておりました。

矢吹晋先生のお話によると、それが朝河博士の入来文書の研究の妨げの原因の一つのようですが、時間も資金も十分でなかった私は、豊富にあつた今川了俊の書状を卒論に使うことにしたのでした。

丁度その頃、『史観』に早大文学部教授京口元吉先生が、確か「入来院氏と入来文書」という題だったと思いますが、朝河博士の研究の紹介があり、友人たちの間で話題になりました。しかし私は結婚したのは、夫とであり家ではないと思っていましたから、返って反発していました。

「定年になったら入来に戻る」ということは、夫との初めからの約束でしたので、私も定年となり抵抗もなく姑との生活に入りました。

入来町は、四十年間に大きく様変わりしていました。武家屋敷のある麓地区は高齢化が進んでいて、当然ということでしょうが、政治経済の実権は、新興の副田地区や農商業地区に移っていました。

郷土史に詳しいと聞いて本田親虎先生のお宅に何回もお伺いして、往時の話などお聞きしたものでしたが、本田先生の朝河貫一に対する尊敬の念は大変なもので、郷土資料館に胸像を飾らせていました。

当時町の教育委員会主催で月一回「入来文書を読む会」が開かれていて、毎回五〇〜六〇人は集まっているようでした。これは古文書自体をプリントして読解するだけのものですが、私が入ると間もなく終了となっていました。

私が鹿児島に行くことに「友人がいなくて可哀そう」と言つて近年博士号をお取りになつた同級生、杉仁さんが、後輩の三木靖氏と教え子の十五代沈寿官さんを紹介してくれました。それがどんなに今の私の力になつて

いることでしょうか。

彼はまた「朝河貫一研究会」が出来るようだと言った。電話番号も教えてくれました。

当時、足の不自由な姑が居りましたし、大学在学中の三男もいて、お金も時間も無いこととで私の参加は難しいと思ひ、時の福田千太郎に誰か参加させて下さいとお願ひしました。そこで現入来支所長水流通信さんが派遣されたのでした。平成十年は渋谷氏下向七百五十年ということ、何かイベントをと本田先生が言われたのですが、今や経済面にのみ顔を向けている町政にはそれを取り上げる意志は全くありませんでした。

私は地元の女性数人で「入来花水木会」を結成して、短歌会で知り合つた渋谷五族の末裔の方々に集まつて頂いて、渋谷氏下向七百五十年記念北薩歴史探報の会」を企画して実行しました。それは全国からの参加者を集め、町始まつて以来のイベントとなりました。

以後町起しイベントとして、同級生だった現観世鏡之丞の叔母に当る澤田春江さんを介

して紹介された鏡仙会の面々による「入来新聞」を主催しています。

その町起し団体の全国研修会で、饗庭孝典氏にお会いし、氏が「朝河貫一研究会」に所属していることをお聞きして、今や時間だけではどうにかなる私は「今からでも参加させて頂けるか聞いて下さい」とお願ひして入会したのでした。

二人の息子と末娘が東京にいますので、出席することは楽しみで居ります。皆さん、素晴らしいお仕事をしていらっしゃる上に、英語に堪能な方々ばかりで辟易して居りますが、そこは又別の視点からのお手伝いもあるでしょう。

朝河博士の個人的な魅力もさりながら、代表的研究「DOCUMENTS OF IRIKI」の中身を知りたいと、邦訳を熱望して居りましたところ、この度矢吹先生のご苦勞によつて、もうすぐ実現するということで、本当に嬉しく思つて居ります。

私は入来町の町民には、朝河貫一という名

前は周知のこととすっかり思い込んでいました。それが一昨年の研究会で、朝河貫一顕彰会設立準備委員会の出されたカレンダーの頒布を依頼され、麓地区の家庭を廻ったところ、若い家庭では、「入来文書」自体も知らない人が多く、びっくりしたことでした。

歴史を大切に誇りに思っている土地は、古いものを大切にし、壊れてもすぐ復元を心がけます。ヨーロッパは瓦礫一つ一つを丹念に集めて、気の遠くなるような熱意で元通りのものにしていきます。隣の熊本県なども比較的に大切にしている、民衆がお金を惜しまずに寄進して復元しています。

鹿児島は壊すことには頓着しません。廃仏毀釈もこれほど徹底して行なわれたところはないと思います。昨今、やっと入来麓も国の重要伝統的建造物群に指定されましたが、この麓を壊して国道を拡幅しようという計画が根強くあり、ここまで持つてくるのには、私も陰ながら動きましたが、関係者も相当に苦勞なさったことでしょう。

入来は博士の指摘なさっている通り、単一の領主が六百年も統治していた珍しい処です。その間、滅ぼされた渋谷の一族を抱え、領土内の騒乱も飢饉もなくひっそりと続いて来ました。この寒村を世界に紹介したのが朝河貫一博士でした。

先ごろ私は地元にいるというところで、ローマ字の地名の不明な所を探すお手伝いをしましたが、このサツマ弁の音から漢字を探すのは大変なことでしょうに、丹念に調べられた矢吹先生の熱意には頭が下がります。

こんなにも誇ることの出来る先輩を持たた矢吹先生も、顕彰に熱意を持ち生甲斐にしている大勢の後輩を持たた朝川博士も、本当に幸せと思います。

そうした無私の情熱を持ち得る福島県人の温かい県民性に触れる機会に恵まれた私も、同様に幸せだと思っています。